

# 京都の生協

NO. 13

- カメラルポ「雪のあみの生協を訪ねて」
- シンポ「消費社会を生きる視座」
- 沖縄の戦跡を訪ねて

発行/京都府生活協同組合連合会

March●1989

〒604 京都市中京区夷川通烏丸東入ル西九軒町291  
せいぎよう会館内 ☎211-8519



**芽吹く** 南無阿彌陀仏という言葉の意味を、清水寺の福岡精道師に教わりました。南無はサンスクリット語のナマスが転化したもので、「尊敬の念を示す」という言葉。阿彌陀仏は、無限なる時間と空間——つまるところ真理を示します。続けて理解すれば、念仏を唱えるということは、「私は真理に対して敬虔です」という意思を表示することだ——というわけです。

名著『君たちはどう生きるか』で、吉野源三郎さんは語りかけます。「君自身が心から感じたことや、しみじみと心を動かされたことを、くれぐれも大切にしないではいけません。それを忘れないようにして、その意味をよく考えてゆくようにしたまえ」と。

大地に芽吹く草木に何を感じるか、念仏の持つ意味に何を思うか——春を待つある日ある時、心に芽吹いたものがありました。

キャンパスライフを楽しむ人と楽しめない人と



古寺 雅男

立命館大学生生活協同組合理事長

大学が街の中心から西北へ移った故か、滋賀、大阪、神戸、和歌山…などから通う教職員、学生が増えた故か、大学キャンパス（研究室、サークル活動、図書館、食堂、談話室……等）に長時間いる人と、いない人とがはっきりしてきたように思える。遠い原因は大学紛争から見なければいけないかも知れないが、いまの大学での現象は、それなりに顕著である。一概に遠い人が来るのをオックウがったりするというのではない。学生の中には、アルバイトをするためにという理由もあるし、学外でのサークル参加もあるし、多様であることは間違いない。

しかし問題なのは、理由がどうあれ、大学に来たら、その日はタップリいる人と全然駆け足の人とがだいたい決まっているということである。学生の中には、ゼミ、卒論の指導の教員しか知らない人もいるし、図書館はもとより、食堂、書籍、購買、プレーガイドなど多様な活動をしている生協に触れない人もかなりいるのである。「視聴覚教室知ってるかい?」とか、「ラボ使ったことあるか?」とたずねると、語学で一度行きましたと答える学生が多いのに驚く。まして自分のやりたい専門のことで、専門の教員が、自分の学部にいるのに相談もしていないというのにも、しばしばぶつかる。

いまの学生は、概して「人見知り」である。そして「友達を持ちたい」という願望を強く持っている。だから私の出題のレポートに、「大学に入って、サークルに生きがいを感じた」とか、「サークルに入って自分が分った」と応える学生が男女問わず多いのに驚かされる。サークル活動の良さは私もわかる。その活動の経験は、社会に出たとき役に立つことも事実だろう。しかしもっと自分で輪を拡げて行く努力をしたら、さらによかろう。教員の研究室をあちこち訪ねることも大切だし、第一学生達が企画したさまざまな催しに参加して、キャンパス・ライフを楽しんだらどうだろうか。「講義が面白くない」「企画が面白くない」と言って、斜めに構えて、参加しない及び腰では、自分の知りたいこと、やりたいことがわからないと思うのだが。

専門的な講義を聴くこと、語学で絞られること、サークル活動でのうまくなる、強くなるためのトレーニング……少しずつこなしていくところに、真のよろこびがあるのではないか。このごろ教職の相談に来る学生との懇談の中で感じたことである。「キャンパスが活々すること」を考えたら、こんな繰り言になってしまった。

(立命館大学文学部教職課程教室教授・教育哲学)

CONTENTS

- ①雪のあみの生協を訪問して
- ③シンポジウム ●消費社会を生きる視座
- ⑥海外の協同組合——ハンガリーの消費協同組合②
- ⑧沖縄の戦跡を訪ねて
- ⑩永良さんのこと ⑪コープ、イン、京都がオープン
- ⑫大学生協連全国総会 ⑬医療生協近畿ブロック交流集会
- ⑭10周年迎えた橘女子学園生協 ⑮大学生の「食生活」シンポ
- ⑯神明組合員センターがオープン ⑰気になるこの本

ちりめんの里に  
1802人の  
生協の輪

●雪のあみの生協を  
訪問して

京都府の北の端、丹後半島にある網野町は、丹後ちりめんと海水浴客の民宿や農漁業で生計を立てている過疎の小さな町です。

京都駅を出発して約4時間、やっと到着した網野町は、今年初めての本格的な雪の日で、網野駅もまたたく間に積った雪にとまどっているようすでした。

この網野町を活動エリアにするあみの生協は設立されて5年、現在では共同購入班数が251、組合員数1,802名という生協です。

高台に位置するあみの生協の事務所は、昨年移転したばかりで、事務所のメンバーは職員4名と専務の西村さん、非常勤の岡野理事長で、まとまった家庭的な雰囲気につつまれていました。

あみの生協では、京都生協と提携して共同購入企画をくむとともに、「丹後の特産物の普及と地元還元」をめざす「独自商品企画」を手づくりですすめています。ちなみに今週は、お年寄りの組合員さんの手作りで、「そば寿司」の企画でした。このほか、自家製タクアンや天然ノリなど、組合員の要求をもとに、毎週、企画をねっているということでした。

午前8時、商品出荷から同乗し雪の網野をひと



# 人間性豊かなくらしをめざして

1月24日、完成したばかりの大学生協京都館を会場に京都府生協連主催によるシンポジウム「消費社会に生きる視座」がひらかれました。パネラーとなった吉野正治・京都府立大学教授、浜岡政好・仏教大学教授、木津川計・立命館大学教授の3氏が、京都生協理事の末川千穂子さんを司会に、今日の消費社会の特質や生活文化をめぐって示唆に富んだディスカッションをくりひろげました。

パネラーの3氏は、最近、相ついで生協論、生活文化論をめぐり著書を出版されており、この日

の討論も興味深いものとなりました。

3氏は、まず最初に主婦、若者、父親がおかれている現実をふまえながら、「豊かさ」のかけで家族問題が深刻化したり、地域社会の崩壊がすすんでいる今日の消費社会の特質について問題提起をされました。

浜岡氏は『生活革命の旗手たち』を編集するきっかけとなった京都生協組合員の生活実態や意識調査を通じて主婦層がどのように行動しようとしているかを分析するなかで、「これまでのライフスタイルをぬけだし、『生活革命』とよぶべき新しい豊かさをもとめる動きが感じられた」とのべら



まわりしました。どこの班へ行ってもハタ織の音が聞こえ、働き手であるお母さん達の姿は見えません。職員は、雪ですべりそうな足元に気をつけながら、商品を家まで運びます。「大変ですネ」と声をかけると「雪の多い日はスコップで道をつくりながら運ぶから、今日なんぞは平気ですよ」という返事がかえってきました。事務所ですた1人女性の、専務の西村さんは「まだまだ1人当りの利用高が低く、独自性も弱いが、昨年秋のいっせい班会議では、『それでもあなたは食べますか』のビデオを開催班の70%で上映し、食べ物に無関

心でいたらだめだ、という感想が多く寄せられ、これからも、班会を大切に、学習活動を強めたい」と熱っぽく話されました。また「班活動を分担せず1人が請負っている班は、前進しない」とも言われ、このあたりまえとも思われる発言が、大変印象的でした。

「丹後ちりめんの不況で、ちりめんから帯に転換され、また、若い人達は働きに出るので、組合員の中心はお年寄りが多い」など、不況と過疎の厳しい情勢の中でもがんばる“あみの生協”に声援を送りながら帰途につきました。(M)

れました。

吉野氏は、「新人類」「リッチ族」とされる若者のおかれている現実について、とくに学生たちの現状をふまえて、「七つの疎外」を克服するために「幅広い生活体験を若者たちにあたえてやる必要がある」と強調されました。

木津川氏は、明治以来、日本では「熱狂の時代」が日清・日露の時代、15年戦争、高度経済成長期と3回あったが、その中で時には女性が、若者が、そして家族が犠牲になってきた歴史があるとしたうえで、「いまや父親は失権し、女性が地域や社会で活躍しはじめているものなお自立しきれているとはいえないのではないか」と論じられました。

これをうけて自由討論にうつり、人間性豊かなくらしを実現するために、家族と地域の再生を手がかりにしながら自立しあうために努力しあうことが必要であること、協同の輪のなかで創りだされる生活や生活文化の質をたかめることを追求しなければならないことなど、いくつかの方向性、可能性が示されました。

また、こんごの生協の果たすべき役割にも討論がおよび、安全・安心の商品やサービスを提供する活動を基本にしながらも、より豊かな社会を基礎づけるフィロソフィーを作りあげ広めていくような活動がもとめられるのではないかと、「生きる」ことに執着し、「生きる」意味を考えあう場を提供できるような生協になるべきなのではないかと討論の幅がひろがっていきました。

このシンポには生協組合員をはじめ110名余の市民が参加し、熱心に討論に耳を傾けていました。

なお、このシンポにひきつづき、パネラーとなった3氏の著書『もうひとつの生活を』『生活文化の視座』『生活革命の旗手たち』の出版を祝う会がもたれ、なごやかな雰囲気の中に「生活」や「生活文化」をめぐる討論がつづきました。

(H)

木津川計氏



吉野正治氏



浜岡政好氏



## 今度は若い人の「ゆたかさ」への意見も

談論風発、わき出てくる先生方のお話にも、向こう側で聞いていたらもっと楽しかっただろうな、というのがまず第1の感想です。

2つ目は反省。「消費社会」というキーワードの定義づけをそれぞれに出していただいた上で、共有できるところを明確にすることができませんでした。

あまりにも急速なくらしの条件の変化の中で生まれている、世代間ギャップを考える時、生活体験として高度成長以前を知っている者と知らぬ者とは「消費社会」の語の持つ意味がかなり違うのではないかと、と思います。地域での生協運動は今、20~30歳代前半の層を充分にはまきこんでいません。さらに若く、物どころついた時から溢れるモノに囲まれ、発達した情報の渦の中に育った若者たち。お金さえあればどんなことでもできる風潮であればこそ、未来へ

の希望を閉ざされている人たちが、この「ゆたかさ」がこれでいいのか、と疑問符を打った時、「ゆたかさ」を知っている世代の「ゆたかさ」批判とどうかみ合うことができるか。あの場での「消費社会」概念をはっきりさせると同時に、フロアからの若い人たちの考えを聞くことができたよかったです、と思っています。

3つ目は組合員主婦の立場からの問題意識です。女性の就労が今日ほど多くなかった時代でも、働く女性の問題は社会的労働への参加と家庭の両立としてありました。そのことは労働条件や、保育所とか家事労働の社会化という外的条件の整備だけでなく、家庭のありよう、男性優位社会のひな型としての家庭のありようを問うものでもありました。「ゆたかな」社会はお金のかかるくらしを要請しています。かつて「入るを計りて出づるを制す」だった家計は、

「出づるを計りて入るを計る」くらしになっています。

今、生活者としての本当のゆたかさとは何かと問う時、男性もまた働きつつ家庭や地域とのかかわりをどう作り、どうすすめて行くのか、がテーマとして浮かび上がって来ているのではないかと、こういう事が労働のありようの側からも提起されなければならないところへ来ているのではないかと、思えるのです。

家庭は守らなければならないけれど、変えられなければならない存在としてもあると思います。その萌芽はいろいろな形で若い世代の中で生まれつつあるでしょう。そここのところ、生活の側から、生活協同組合がどういう役割を果たすことができるのか、これからの課題の1つだと思いました。

(京都生協理事)



司会者としての感想  
末川千穂子



# 「なぜ今も…」と問う心に 平和の決意が…

## 沖縄の戦跡を訪ねて

1月11日から14日まで、日本生協連主催の「第4回沖縄戦跡・基地めぐり」が行なわれ、全国の生協から36名が参加しました。京都府生協連事務局から私が参加する機会をえましたので、概要を報告します。

沖縄に近づく飛行機は、徳之島付近にさしかかると、急に低空飛行になります。これは米軍空域を避けるためですが、ここからも、沖縄がなお陸だけでなく空も海も、事実上、米軍の統治下にあることを感じさせます。

初日の学習会は、沖縄をしっかりと見聞きしようという、全国の生協からの参加者の熱気でいっぱいでした。

沖縄県民生協理事長の仲松弥秀氏は、歓迎のあいさつで「天皇は沖縄を売った人で、平和主義者というのは全くうそだ」と手きびしく批判されました。

つづいて安里要江さんは一家6人をなくされた沖縄戦について「私の沖縄戦」として証言をされましたが、戦後43年経過した今も沖縄戦を苦悩のうちに語りつづけておられる勇気に参加者全員が感動させられました。現在、安里さんは村会議員として平和のために精力的に活躍されており、悲しみをのりこえ、「ヌチドウ宝」（命こそ宝）にこだわり続ける強さをもっている方とおもいました。

今、沖縄は、観光化され戦争が風化されつつあるなかで、「戦争のつめ跡を知らせ、平和の尊さを訴えよう」と戦跡めぐりのガイドとして活躍し

ておられる県民生協の石原さんの案内で、私達は観光コースから離れ「真実の沖縄」を観ることが出来ました。

1945年4月1日、海が真黒にぬりつぶされるほどの米軍が沖縄中部に押寄せ、18万の米兵が上陸。南北分断作戦は無血で成功しました。その時、日本軍は、壕に陣地を置き、避難民と共に『敵が至近距離まで来るのを待ち殺す』戦術のため多くの犠牲者を出しました。「お国のために死ぬ」「鬼畜米兵」と教えられてきた住民は自決し、捕虜になろうとした者や足手まといになる老人・子供・負傷者は日本兵の手で殺されました。糸数壕に入ってみて「死んでもいいから外へ出たい」と絶叫した犠牲者の声が聞こえてくるようでした。また、戦後35年目に発見されたチビチリガマは、84名の集団自決者を出しながら、村民は一言も口外せず秘密にしてきたといえます。

沖縄戦終結後、生存者は死体を集め魂魄の塔に埋葬しました。『県民個々の戦争体験を結集』した摩文仁公園の平和資料館は、時間を取って訪れたい場所です。また、県民の4人に1人が犠牲になった沖縄戦の中でも、米軍司令官バックナー中将が戦死した国吉部落は、報復攻撃を受け、多くの一家全滅が出た地です。跡地には祠だけの空き屋敷が点在しています。

3日目の基地めぐりは、平和委員会の村上さんをガイドに出発しました。

一見、平和な那覇を離れると、まさに「基地の中に沖縄がある」という言葉の意味が納得できます。特に嘉手納基地は、「リトルアメリカ」「極東



いまでも犠牲者の叫び声が聞こえるような糸数壕

の不沈空母」といわれ、町全体面積の84%を占有し、米人住宅はじめ学校や銀行などあらゆる施設を有する核基地です。

巨大な基地を前に一瞬無力化した私達を勇気づけてくれた「基地と闘う」読谷村では、「土地を取りもどし文化村づくり」をめざし、ねばり強いたたかいが続けられています。グリーンベレーが配備されているトリステーションはじめ、象のおりと呼ばれる傍受施設があり、パラシュート降下訓練がひんぱんに行われ、住民への被害が絶えません。

基地経済に依存する沖縄の歓楽街は、円高の影響でさびれていましたが、それでも給料日には、米兵が「ジャバゆきさん」とたわむれる姿があちこちで見られ異様な世界を見せるとのことです。

世界中でここだけ実弾射の演習が行われると通行止めとなる県道104号線も、天皇死去による自粛で演習は休みでしたが、いつもは頭上を実弾が



日本では三沢基地と読谷にある「象のおり」

飛び交うと聞いて、驚きの声があがりました。

その夜の総括会議では「どうしてこのようなむごたらしい戦争が起こったのか」という共通した疑問が出されました。話しあいを通じて、「忙しさに流されて何の疑問も持たなくなっている生活にこだわりながら平和の尊さを訴えていこう」と確認しあい、3日間のおたがいの健闘をたたえあいました。

参加者は真実の沖縄を知らせようと献身的に行動している沖縄県民生協の皆さんをはじめ、ねばり強く平和へのたたかいを続けている沖縄県民の皆さんへの熱い連帯のころをおみやげとし、それぞれの帰路につきました。

(京都府生協連事務局・増田隆子)



戦争体験者の生々しい記録を伝える平和祈念資料館



# 京都の生協と消費者運動の リーダーとして [永良さんのこと]

京都府生協連常務理事  
**原 強**

京都府生協連名誉会長の永良巳十次さんが他界されました。1989年1月18日午前11時15分、享年83歳でした。

永良さんは「生きるとは戦うことである」との言葉を遺されましたが、永良さんの一生はその言葉のとおり戦いにつぐ戦いの連続でした。そして、その一生に永良さん自身は決して悔いがなかったといっってよいでしょう。

戦前には同人雑誌に掲載した作品を理由に治安維持法違反で検挙され、戦後は重税反対闘争のなかで公務執行妨害で逮捕されることによって、永良さんは平穏な人生への道を断たれ、どん底の生活のなかから戦う人生への道を選ばざるを得ませんでした。

ミレー書房での仕事を経て、永良さんは、1954年、京都大学生協に職を得て以来、生協運動に身をおき、消費者のくらしと健康を守る運動、さらに日本の平和と民主主義を守る運動の発展のために献身的な努力を積み重ねてこられました。

永良さんは、60年安保闘争のなかでは京都大学の学生・教職員とともに平和と民主主義のためにスクラムをくみ、京都大学生協が組合員の要求を基礎に民主的な運営体制を確立する時期には労を惜みず尽力されました。

1964年、洛北生協（現在の京都生協）が設立され、地域でのくらしと健康を守る消費者の運動が

はじまりました。永良さんは、再建された京都府生協連の専従役員としての活動に身を投ずることになりました。

1969年11月、第1回京都消費者大会が開かれました。この大会の企画・準備の段階から当日まで、消費者の団結を訴え続ける永良さんの姿がありました。

第2回、第3回の京都消費者大会、さらに「物価値上げに抗議する京都府市民大行進」のとりくみを通じて、1972年7月、京都消費者団体連絡協議会が結成されることになりました。永良さんは生協を代表して初代の京都消団連代表幹事のひとりに出選されました。

京都消団連は消費者米価、電気、ガス、私鉄など公共料金値上げ反対運動や有害食品追放の運動を開始しましたが、永良さんは常にその先頭に立ちました。「石油パニック」に際して大企業の横暴に満身からの怒りをぶつける永良さんに勇気づけられ、共鳴の拍手をおくった主婦や学生も少なくありませんでした。

1976年6月、日本生協連第26回総会が京都で開催されました。来賓として出席した蜷川知事の、ユーモアをまじえ熱のこもったあいさつに会場がわきました。永良さんはこのときの感動を「日本の生協運動は、よりよい生活と平和、そして正しい民主主義をもとめる国民運動のなかで、ようやく歩

調を整えて前進している。その隊列に遅れまいと、私は余力をふりしぼりあとに従う。おおげさというなら、それが私のいきがいである。」と書きつづっておられます。

1982年7月、永良さんは京都府生協連の会長職を辞し、第一線から退かれました。

節を曲げず、情熱を傾け、戦い続けた永良さんは、京都の生協と消費者運動のリーダーでした。その京都の生協と消費者運動が、京都の地域社会

の一員として広がり、根づいていくことを見守りながら、無上の喜びを感じておられることでしょうか。


永良さんは、生前、ご自分の一生をご自身で書き記しておきたいと何度も語っておられましたが、結局、その夢は果たされずに終わりました。しかし、永良さんの一生は、永良さんを敬愛する多くのの人によって、いつまでも語りつがれていくことでしょうか。

## コープ・イン・京都がオープン

### 大学生協京都館

京都市中京区柳馬場蛸薬師上ル(〒604) ☎075-256-6600

大学生協の全国の連帯の力を基礎に建設された大学生協京都館（コープ・イン・京都）がこのほどオープンしました。設備の概要を紹介します。




#### コープ・イン・京都 ご案内

- シングル・ルーム 83室
- ツイン・ルーム 15室
- 身障者用ツイン・ルーム 1室
- エグゼクティブ・ルーム 1室
- 和室(8畳) 8室
- (客室総数 108室)
- 大ホール(200名収容)
- 会議室(50名、20名、20名和室)
- レストラン(60席)
- バー・コーナー
- ラウンジ
- その他、ロビー、エレベーター完備。

#### 客室料金(税・サ込)

シ ン グ ル	5,500円～
ツ イ ン	10,340円～
和 室	15,510円(3人の場合)～
エグゼクティブ	17,500円～(ツイン)

▶シーズンによっては料金が変わる場合があります。  
●チェックインタイム 午後3時  
●チェックアウトタイム 午前11時  
※コープ・イン・京都は、組合員及びそのご家族の方も御利用いただけます。

## ●ふれあい●学びあい●社会へのアピール 大学生協連第32回全国総会 京都で開催。

昨年(1992年)の12月17、18日の両日、全国大学生協連合会(大学生協連)の第32回全国総会が京都府総合見本市会場(パルスプラザ)で開催されました。京都で大学生協の全国総会が開催されるのは、20数年ぶりのことで、大学生協連として1つの画期となった総会だと言えます。

全国総会では、89年度に大学生協全体ですすめる活動方向として“組合員の生活づくり、仲間づくりをすすめる、組合員にとって魅力ある大学づくりをすすめる”ことが確認されました。そして、“魅力ある大学づくり”をすすめる4つの組合員活動が具体的に明らかにされた総会でした。4つの組合員活動は次の通りです。

1. 生協として大学の勉学・研究活動を支えていく。
2. 生活文化の向上をめざす取り組みをすすめる。読書推進活動をすすめる。
3. 大学の福利厚生全般をよりよいものにしていくこと。施設改善と食生活改善活動をすすめる。
4. 学生・院生・教職員同士の交流とコミュニケーションを活発にしていくこと。

また、今回の総会はさまざまな意味で画期をなすものでした。まず、大学生協をめぐる環境変化として、1992年以降の18歳人口の減少を前に、全国の大学で90年代や21世紀における大学のあり方についての検討と具体化が始まった時期であること、消費税導入、生協課税強化の動きがあり組合員の生活を守り、生活向上をめざす社会的な存在としての生協の真価が問われていること、京都宿泊研修施設(コープ・イン・京都)が建設され、地域社会との関係づくりが問われていること、など、大学生協が21世紀に向けた日本の社会や大学の変化をふまえ、大学生協としての中・長期の活動方向を見定めることが総会の任務となりました。そ

の意味では、魅力ある大学づくり、組合員参加の、みんなで作るみんなの生協づくりの活動テーマの具体的実践がもたらされています。

全国総会の運営も一新されました。従来の全国総会は、“プロイラー方式”と呼ばれ、早朝から夜まで総会参加者を狭い会場に詰め込み、食事も弁当を食べさせるといったもので、参加者にとって時間的にも、精神的にも大変窮屈な総会でした。今回の全国総会は、運営コンセプトとして——ゆとり／ふれあい／学びあい——を設定し、テーマ別分散会討論の導入、昼食時間の大幅延長とコミュニケーション重視の食事形式の採用、単協活動紹介の“単協ブース”の設置、夕食レセプションの実施など全国総会運営が刷新されました。全国総会参加者にとって大変好評であった反面、全国総会運営、昼食、レセプションを2日間支えた京都の会員生協、事業連合の生協職員、取引先の皆さん、そして全国総会事務局の学生委員の皆さんのご苦勞は大変であったことと思います。

21世紀を見据えて、全国の大学生協が全国総会で決定した方針を組合員と共に実践し“魅力ある大学づくり”に貢献する活動を力強くすすめることがもたらされています。同時に、大学生協間の連帯のみならず、社会的な存在として地域社会の中で役割発揮をどのようにすすめるのか、大学生協全体の大きな今後のテーマとなっています。その意味では第32回全国総会で決定された方針は大変意義深いものとなっています。

(大学生協関西地方連合会事務局長 南波好孝)

## 医療生協近畿ブロック 組合員交流集会も京都で ●7月22～23日、300人規模目標に

第11回近畿ブロック組合員交流集会が、来る7月22日～23日、京都(石長・松菊園)ではじめて開催されます。

この組合員交流集会は、1979年神戸市(有馬)で第1回が開催され、14単協43名が参加、その後毎年近畿ブロックに参加している単協が、それぞれの府県で持ちまわり開催をしてきました。

近畿ブロックには27単協(別表)があり、ここ数年は、組合員の力で交流集会を成功させることをめざして開催して来ましたが、一昨年頃から非常勤理事・総代・組合員で実行委員会を組織し、事務局は昨年から数単協の職員が分担するようになっています。

今年は、大阪の2単協(淡路医療生協・城東鶴見保健生協)と京都医療生協、乙訓医療生協が共同で事務局となり、実行委員長に塩貝信子氏(乙訓医療生協理事)、事務局長に山内貞信氏(京都医療生協常務理事)を中心に準備をすすめています。

今回の第11回近畿ブロック組合員交流集会は、「27全単協から10名以上の参加」で300名の受け入れをめざしています。

組合員ひとりひとりがこれからの医療生協と生協運動を発展させるための展望をつかめることを目標に取り組んでいます。

記念講演は、夏目文夫・京都府生協連会長に「人間の詩——松葉杖で生きた『昭和』——」をお願いすることが決まり、今から期待の声が聞かれます。

単協報告では、医療も福祉も大きく改悪されて厳しくなるなかで、「医療生協が課さなければならない今日的役割」について2単協、「班中心の活動・経営改善」など4単協が予定されています。

1年間の組合員活動の経験を互いに交流し、「近畿の医療生協はひとつ」を合言葉に、厳しい情勢に負けない活動をめざして1分散会・10分科会で交流します。

京都医療生協、乙訓医療生協は、今回はじめて事務局に参加していますが、地元の医療生協として交流会の成功を期し、それぞれ法人内でも実行委員会を組織し準備を行っています。

府県別	単協数	病院	診療所	歯科診療所	院所数計
京都	2	0	7	0	7
和歌山	1	1	3	0	4
大阪	17	4	23	2	29
兵庫	7	4	15	3	22
合計	27	9	48	5	62

※写真は第10回(昨年)の全体会のものです。

(乙訓医療生協専務理事・鳴海義之)



# 10年目を迎えた 橘女子学園生協

京都橘女子学園生協は、1977年12月14日に609名の賛同を得て創立されました。79年11月26日には法人格を取得し、その後10年の歴史を刻んできました。特に、昨年は大学における福利厚生担当業者の一本化ということで生協に食堂、喫茶、書籍の各事業が移管されました。これによって、これまで購買部だけだった生協が組合員の様々な生活分野に対応できるようになったといえます。

9月に完成した学生会館（リバティーホール）に全部門が移り、新しい店舗で事業を進めており、文字通り飛躍の年となりました。

振り返ってみますと、この10年間は着実に組合員数も利用高も増加し続けてきました。

創立当時の理事会議事録や学生委員会の討議資料などを見ますと、組合員加入をもっと進めなければならないとか商品の品揃えなどについてリアルな状況が出し合われ、真剣に論議されていた様子が伺えます。当時はまだ、学生自らが専務理事に就任するなど、今では考えられないような苦勞が多くあったと推察され、今更ながら諸先輩の方々へ頭が下がる思いです。

このように、10年間の歩みは着実ではあったけれども決して平坦なものではありませんでした。当生協のような小規模生協が、それでも今日のよ



うな到達点を築く事が出来たのは、組合員の努力に他なりません、同時に大学関係者、業者の皆さん、そして困った時にいつも援助いただいた他生協による連帯活動があったからこそであると痛感しています。

88年度は、新店舗開設などのため経営的には厳しくなっていますが、店舗委員会活動が前進し、利用も急増しております。

来年度からは、現在の到達点を基礎にして大学の中で「無くてはならない」存在から「頼りになる生協」へと前進させたいと思います。そして、魅力ある大学作りに少しでも貢献できるよう、中期的な方針を持つため、中期計画の検討を進めようと考えております。

(京都橘女子学園生活協同組合専務理事・森田真次)



# 大学生の食生活は、いま…

## 大学生協京滋ブロック・事業連合が シンポジウムを開催

昨年12月9日、大学生協京滋ブロックと大学生協京都事業連合の共催で「大学生の食生活を考えるシンポジウム」が開かれました。これは、全国大学生協連合会が実施した『第2回大学生の食生活調査』（88年6月実施）のまとめを受けて、大学生の食生活や、健康に関わって様々な分野の人々から問題提起を受け、考え合おうということから企画されたものです。

企画や準備の中で特に力を入れたのが、生協のない大学の厚生課、学生課、保健センターなどの大学職員の方に来ていただくことでした。私たちの呼びかけに、大学の方の反応は非常によく、「生協というのはこういうことをしているのですか」「一大学ではできないけど、生協だからいろいろな分野の人が集まってこういうことができるのです」と、興味や関心を持って受けとめていただけました。また、コープ・イン・京都という施設が大学の人にはとても魅力的な事業として映っていて、「私たちが利用できるのですか」といった質問もあつたりしました。

当日は、まず、京都事業連合の中井邦子栄養士から、朝食をとらない傾向が続いていること、昼食を1人でとる学生が増加（＝孤食）、これが生活リズムの乱れと連動しているなどといった調査結果の概要が報告されました。また、グルメ志向や、ダイエットへの強い関心がある一方、食生活を含めた生活全体の自立が十分でないなど、社会的な問題も含んでいることが明らかになりました。

この報告を受けて、問題提起では、神戸大学の丸谷宣子助教授が、第1回の同調査からの変化について専門の栄養生化学の観点から、また、立命館大学の木津川計教授からは、食文化と文化生活の関わりについてそれぞれお話がありました。また、京都新聞記者の鈴木富美子氏は「狙われる食卓」というテーマで企業の戦略を紹介、主婦で京



都生協の組合員でもある安井千鶴子氏は母親の立場から「米を中心とした食事」を強調、生協の事業責任者として京都橘女子大学生協専務理事の森田真次氏からは、女子大生のダイエット志向と健康の問題についての報告、そして、当の学生の立場からは京都大学3回生菅波完氏が、実際の大学生活との関わりから、「いまどきの大学生のく・ねる・遊ぶ」と題しての問題提起があり、各々の立場からユニークな話がされました。

当日は大学関係者、マスコミ、生協の取引業者など、約160名の参加者がありました。なかでも生協のない大学から約10名の参加があり、大学生協の幅広い活動の一環を知ってもらえたと同時に、今後様々な取り組みをする上でのつながり作りとすることができました。

これからはこのシンポジウムのまとめを参加された方、されなかった方々に返していく中で、さらに広く、深いネットワークを作りあげることが大切だと感じています。

(大学生協京都事業連合・井崎宏子)

# 京都生協の 神明組合員センターがオープン

●2月2日、宇治市近鉄伊勢田駅付近に



2月2日、宇治市の近鉄伊勢田駅近くに、京都生協の神明組合員センター（店舗）がオープンしました。

このセンターには障害をもつ組合員のための設備があり、通路も広く段差もありません。広さ150坪の店内には、手をのびしやすい高さの陳列ケースに食品、日用雑貨などが豊富な品揃えで並べられており、ワンポイントショッピングが可能です。焼きたてパンのベーカリーショップにはコミュニティスペースがあり、地下には組合員活動のための広い集会室があります。

開店当初4日間は記念行事・サービスがおこなわれました。この地域の組合員たちが力を発揮し、組合員加入の受付や案内、おでんのサービス、もちつき、風船渡し、コープ商品の試食会、節分のおすしの販売などに大忙し。開店当日2,800人、当初4日間では合計約1万人の来店者があり大混雑でした。階段のロビー、地下の集会室にはこのセンターで開かれる組合員サークルからの花が飾

られ、「わたしたちのおみせ」をつくるという願いがようやく実って、組合員たちは「きれいね」「広いね」と笑顔をかわしていました。この地域では共同購入がさかんですが、いつでも生協の商品が買える場、組合員のふれあいの場として、生協の組合員センターを近くに求める組合員の声は日ごとに強くなり、開設へむけて活動がすすめられてきました。

このセンターの千葉店長は、「1985年12月16日、センター準備会総会を開いてからオープンまで3年半の長い長い道のりでした。大手小売業者にはさまれたこの地域の小売業者からの根強い抵抗がありました。話し合いを重ねて出店の同意を得ることができました。今回、オープンにあたって折込広告を出すことも了解を得ました。まだ具体的な協力協同はなされていませんが、小売業者との協議会を通じて地域の振興のために手をつないでいこうと考えています」と語っていました。

(S)

## ●気になるこの本

大学生協関西地連『まるごと大学生活  
京滋ブロック編

—キーワード30』

滋賀大学経済学部教授

成瀬 龍夫

世の親たちは、わが子を大学に入れるのは熱心であるが、大学入学後にどんな生活をすごしているかについては、あまり御存知ではないかと思う。大学生ともなると、もう大人だし、また大半の学生がなんとか4年間の学業を終え、無事就職もしている現実もあるので、親が今更息子・娘の学生生活のことを詳しく知らなくても大丈夫という人が多いと思う。

しかし、あにはからんや、今日の学生生活は、親がばく然と想像しているほど平穏無事では決してない。私の大学の学部では、今年度だけで6名の死亡者（交通事故死3名、病死1名、自殺2名）が出ているし、留年生は毎年2割に達する。私のゼミ生で、母子家庭のM君なども、親の浪人しないで現役でという期待に応えて入学してきたのだが留年してしまって、自分の「親不孝」を悔やんでいる。クラブ活動で勉強がまったくお留守の者、部活の費用稼ぎのため春・夏・冬の休みを帰省もせずにアルバイトにあけくれている者、クラブに入らず友人も少なくパチンコにのめりこむ者等々、必ずしも安心してみておられない諸君が結構たくさんいる。

親たちよ、もっとわが子の大学生活の実態を知ろう！まさにこんな気持ちにピッタリの本が登場した。大学生協関西地連京滋ブロック編『まるごと大学生活』がそれである。

大学生協は、全国の約160大学で92万人の学生、教職員を組織し、食堂、書籍、購買、さらには共済事業などを通じて安心で、安全、魅力ある大学生活づくりに取り組んでいる。いまや、学生生活のことなら何でも大学生協に聞けといってもよいほどの存在になっているが、そうした大学生協の日常活動のなかからとらえた今日の学生生活の実態が本書で詳しくあきらかにされている。何も、暗い心配な面だけ浮彫りにしようとしているのでは



ない。そうではなく、1人1人の大学生が、さまざまな生活条件、生活環境のなかで、いかに悩みつつもまたたくましく自らの人間的な成長や自立をめざしているのかを知らせたい、というのが本書のねらいである。

したがって、本書は、世の親たちにこう呼びかけている。

—いま、「大学生」と呼ばれている222万人。

その1人ひとりもっているそれぞれの個性と生活のひろがり。

彼らのすべてを語り尽くすことは到底できないことだ。

でも、まず、読んでほしい。そして知ってほしい。

彼らが、自らの自立と意義ある学生生活を求めて悪戦苦闘していることを。

そんな学生たちの姿を

30のキーワードで綴ってみた。

わが子がこれから大学にすすもうとする親たち、またすでにわが子が大学在学中の親たちに、本書をぜひ一読していただき、今日の若者たちの大学生活についての認識をゆたかで生き生きとしたものにしていただきたいと思います。

(かがわブックレット・350円)

# ごあんない

## 夏目文夫著『人間の詩—松葉杖で 生きた「昭和」』の出版を祝う会

京都府生協連会長の夏目文夫氏(弁護士)が『人間の詩—松葉杖で生きた「昭和」』と題した著書を、かもがわ出版から上梓されます。大正14(1925)年生まれで、昭和の年代と同じだけ年齢を重ねてこられた夏目氏の著書の出版を祝し、励ましあいます。

- と き 1989年3月18日(土)  
午後5時受付 5時30分開会～8時
- ところ 京都ホテル・松の間  
中京区河原町御池 ☎075-211-5111
- 会 費 1万円(著書進呈)

## 永良巳十次さんを偲び、 思い出を語るつどい

京都の生協と消費者運動のリーダーとして活躍してこられ、1月18日に他界された(享年83歳)京都府生協連名誉会長の永良巳十次さんを偲び、思い出を語りあいます。

- と き 1989年4月15日(土)  
午後5時30分受付 6時開会
- ところ 大学生協京都館(コープ・イン・京都)  
中京区柳馬場蛸薬師上ル  
☎075-256-6600
- 会 費 5,000円

## シンポジウム

### 京都のタクシーのこれから

タクシーは公共交通機関の補完物として、市民の足として不可欠なものです。いま、消費税実施を前にタクシー運賃への消費税の転嫁、従来からの同一地域同一運賃の原則はどうあればいいのか、タクシー事業のあり方やタクシー行政への利用者の参加あり方などについてさまざまな立場から意見交換をする場となることをめざします。

- と き 1989年3月15日(水)  
午後1時30分～4時
- ところ 京都労働者総合会館  
(中京区四条御前)
- プログラム  
主催者あいさつ/問題提起/各界の発言  
(業界・タクシー労働者・利用者代表)/  
自由討論/まとめ
- 参加自由/入場無料
- 主催/京都消費者団体連絡協議会  
☎075-211-9513

くらしを通して原発・エネルギー・環境  
を考える全国消費者キャンペーン

### 3月27日 「キャンペーン」スタート のつどい

- 府立勤労会館 ●午後1時30分
- 講演「スリーマイル事故のおしえたもの」  
庄野義之(福井大学工学部教授)
- アピール採択

### 3月28日 スリーマイル島原発事故 10年のつどい

- せいきょう会館 ●午後6時30分
- 映画「チャイナ・シンドローム」上映

### スリーマイルからチェルノブイリへ そして……

### 4月26日 チェルノブイリ原発事故 3年のつどい

- アバンティ・ホール ●午後6時30分
- 映画「24000年の方舟(はこぶね)」
- 講演「日本の原発・エネルギー政策を問う」  
中島篤之助(中央大学商学部教授)

連絡・問合せ  
京都消費者団体連絡協議会 ☎075-211-9513